

豚熱ワクチンの接種日齢は定期的に見直しましょう！

豚熱は、令和8年10月9日時点で106例の発生事例が確認されています。豚熱疫学調査チームが実施した現地調査結果より、群馬県や静岡県での事例では、分娩舎内の哺乳豚や離乳子豚から発生していたことが報告されています。近年、抗体価の低い母豚の割合が増加していることで、「ワクチン接種による免疫を獲得する前に子豚の移行抗体が消失し、防御不全となっていた」と推察されています。

自農場を守るためにも、毎年実施している免疫付与状況調査結果を基に、子豚への豚熱ワクチンの接種日齢を定期的に見直し、子豚の免疫の空白期間を最小化することが重要です。

豚熱に対する子豚の防御

① 移行抗体

□ 母豚の抗体価は、生まれた子豚の“免疫の強さ”を示します

⇒ 豚熱ワクチンを接種していない哺乳豚は、生まれてすぐに飲む初乳を通じて、母豚から移行抗体を受け取ります。つまり、「母豚の抗体価と、哺乳豚が受け取る移行抗体価は同じ」と考えることができます。

□ 母豚の初乳から獲得した移行抗体は、時間とともに減少します

⇒ 約11日で半分ずつ減少します（この時間を「半減期」と言います。）。

□ 豚熱の発症防御には、移行抗体価32倍以上が必要とされています

⇒ 豚熱の発症防御の目安となる「移行抗体価32倍を下回る前」にワクチンを接種することが、子豚の「免疫の空白期間」を作らせないことに繋がります。

< 子豚の移行抗体価の推移（半減期11日） >

日齢	移行抗体価(=母豚の抗体価)						
0日齢	8倍	16倍	32倍	64倍	128倍	256倍	512倍
11日齢	4倍	8倍	16倍	32倍	64倍	128倍	256倍
22日齢	2倍	4倍	8倍	16倍	32倍	64倍	128倍
33日齢	1倍	2倍	4倍	8倍	16倍	32倍	64倍
44日齢		1倍	2倍	4倍	8倍	16倍	32倍
55日齢			1倍	2倍	4倍	8倍	16倍
66日齢				1倍	2倍	4倍	8倍

防御の目安：32倍

② ワクチン

□ ワクチン接種から効果が発現するまでに、3～5日程度かかります

□ ワクチン接種により獲得した免疫は、中和抗体価1倍以上で防御効果があります

□ 一方、ワクチン接種を行っても、免疫を獲得できない個体が一定数いるとされています

⇒ ワクチン接種だけに頼らず、飼養衛生管理の徹底は必要不可欠です！

ワクチンブレイク

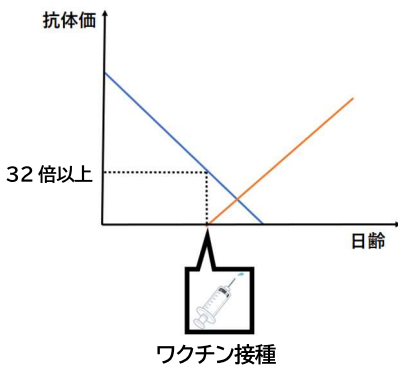
- 移行抗体価が高い状態でワクチン接種すると、移行抗体がワクチンに影響を与え、十分な効果が得られないことがあります

⇒ ワクチン接種時の移行抗体価が 128 倍以下であれば、高率にワクチンテイクできると考えられています。管内の母豚抗体価のピークは、8～32 倍（令和8年度上半期時点）となっており、ワクチンブレイクを起こすほどの高い抗体価を持つ母豚は少なくなっています。

豚熱ワクチン接種日齢と子豚の移行抗体価の関係

（—：移行抗体価、—：子豚の抗体価）

① 理想的な接種日齢



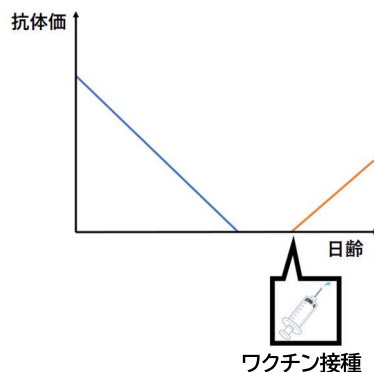
- 豚熱の発症防御の目安となる“移行抗体価32倍を下回る前”に、子豚にワクチンを接種します。

⇒ 免疫の空白期間を作ることなく、免疫によって常に守られている状態です。

- 適切にワクチン接種された子豚が豚熱ウイルスに感染した場合、ウイルスの増殖や排出は大きく抑制されます。

⇒ 発熱等の臨床症状をほとんど示さず、感染拡大のリスクも低いとされています。

② 接種日齢が遅いと…



- 移行抗体価 32 倍以下での接種では、豚熱ウイルスに対して無防備の状態、つまり「免疫の空白期間」をうみだすこととなります。

- 豚熱ワクチン未接種や免疫獲得前の子豚が豚熱ウイルスに攻撃された場合、全身でウイルスが増殖し、長期間ウイルスを排出します。

⇒ 臨床症状を示し、感染拡大のリスクが非常に高い状態です。

豚熱ワクチンと他疾病ウイルスの関係

- 豚熱発生事例において、豚熱を発症した豚からPRRSウイルスやPCV2ウイルスの遺伝子が検出されています

⇒ PRRS ウイルスや PCV2ウイルスの感染は、豚自身の免疫力の低下へと繋がり、豚熱ワクチン接種の効果を低下させるとの報告があります。

まとめ

農場を守るためにも、飼養衛生管理基準を遵守するとともに、農場の母豚の免疫状況に応じたワクチン接種日齢となるよう、適宜、接種日齢を見直していきましょう！